

講演要旨

統一テーマ「PRRSの現状と課題」

1 豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）の現状と最新の学術的知見

動物衛生研究所 高木道浩

豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）は、PRRS ウイルス感染によって引き起こされる母豚の流死産などの繁殖障害と育成肥育豚の呼吸器病を主な症状とする疾病であり、世界の養豚産業において大きな経済損害をもたらしている。

PRRS ウイルスには遺伝学的多様性がある事が知られている。我が国において、PRRS ウイルスが初めて分離されてから 20 年以上が経ち、国内流行ウイルスにおいても遺伝学的な多様性が認められており、これが農場内で常在化しやすくなる一因となり、農場での PRRS 対策を困難にさせている。本講演では、我が国での PRRS ウイルスの遺伝学的多様性、国内で初めて分離された欧州型 PRRS ウイルス、我々の研究と最新の学術的知見について紹介する。

2 海外・国内の PRRS 最新知見

—科学的根拠に基づいた PRRS 対策を—

(株)スワイン・エクステンション&コンサルティング、ミネソタ大学豚病撲滅センター、

PRRS 撲滅推進チーム・ジャパン (P-JET) 大竹 聡

PRRS は、現在の世界の養豚産業において最も経済損害の大きい疾病の一つとして知られている。本発表では、海外（主にアメリカ）と国内の PRRS 最新知見を要約し提示することで、科学的根拠に基づいた PRRS 対策の重要性を説く。

- PRRS ウイルスの特徴
- PRRS の診断
- PRRS 免疫安定化（ステージ定義）
- PRRS ウイルスの伝搬経路
- バイオセキュリティ
- PRRS 清浄化の取り組み
- 地域ぐるみの PRRS 対策（P-JET）

3 養豚密集地域における PRRS 対策の事例

JA 鹿児島県経済連養豚事業部養豚課 川畑 忠祐

本会では平成 20 年より直営農場を中心に PRRS のコントロール・清浄化に向けた取り組みを実施してきた。

基本対策として育成母豚の馴致、オールイン・オールアウト、農場内・外防疫の徹底を設定し、対策を継続することで一定の効果を得る事ができた。

しかし、対策の効果は農場毎に異なっており、特に PRRS の浸潤状況、立地条件などに大きな影響を受けている事がわかった。今回、PRRS が高度の浸潤した養豚密集地帯における PRRS 対策の 1 事例について報告する。

一般演題

1 豚増殖性腸炎と *Lawsonia intracellularis* の感染動態

動物衛生研究所 三上 修

豚増殖性腸炎は偏性細胞寄生性菌である *Lawsonia intracellularis* の経口感染によっておこる消化器疾患で、急性型と慢性型に大別される。急性型は 4-12 ヶ月齢の肥育豚や繁殖豚で認められ、罹患豚はタール便を排泄し急死する。一方、慢性型は 6-20 週齢の肥育豚でみられ、下痢や軟便を呈する場合もあるがはっきりとした臨床症状を示さないことも多い。しかし、*L. intracellularis* 感染により増体や飼料効率が低下することから、潜在的な経済的損失は無視できない。本発表では豚増殖性腸炎の病態と、*L. intracellularis* 感染後の菌の動態を中心にお話ししたい。

2 豚の反芻獣ペスチウイルス感染事例

茨城県鹿行家畜保健衛生所 榊原 裕二

平成 24 年 2 月、管内一貫養豚場の、豚コレラ清浄性確認検査を実施した結果、29 頭中 14 頭に豚コレラ ELISA 抗体陽性が確認された。そのため緊急立入を実施したところ飼養豚に臨床的な異常はなく、新たに採血した 120 日齢の肥育豚 1 頭からペスチウイルスを検出する遺伝子検査で陽性となり、ボーダー病ウイルスに近縁の反芻獣ペスチウイルスと判明した。また、ELISA 抗体陽性となった血清を用いた中和試験の結果、豚コレラは否定された。更に病性鑑定及び清浄化対策の結果、発育遅延豚 3 頭と肥育豚 1 頭から反芻獣ペスチウイルスが分離された。これらウイルス排泄豚 4 頭を淘汰後、5 月以降当該農場でのウイルスの流行は沈静化したと考えられた。

3 豚丹毒集団発生事例からみた本症予防衛生管理の問題点

㈱ピグレッツ 渡辺一夫、㈱サミットペテリナリーサービス 石川弘道、

㈱高座豚手造りハム 北条那智

4 戸の一貫経営養豚場の肥育農場において豚丹毒が集団発生し、この間の事故率は 10% 前後であった。これらの農場の飼育形態は開放オガクズ豚舎であり、棟毎に AI/AO を実施していた。豚丹毒ワクチンはいずれも生ワクチンを使用していたが、1 農場は繁殖豚のみの接種であった。また、いずれの農場も、出入口の石灰散布、入場車両の消毒、消毒槽の設置などの衛生管理は実施していた。豚丹毒の発生要因はカラスによる豚丹毒菌の伝播が強く疑われた。また、生ワクチン接種時期にも問題があったと考える。いずれの農場でも豚丹毒不活化ワクチンを 60 日齢と 90 日齢の 2 回接種により終息した。

4 動物用医薬品の適正使用に向けた取組みについて

㈲あかばね動物クリニック 伊藤貢

動物用医薬品の使用は疾病対策にとって重要だが、一方では耐性菌の出現や国産豚肉の安心を揺るがす問題に発展する危険性もある。デンマークでは、1994 年から獣医師の定期的な農場訪問を法律化して抗生剤の使用を厳しく管理している。さらに 2011 年からは全ての生産者の抗生剤の使用をモニターし、使用の多い生産者および管理獣医師に改善指導がなされるシステムがスタートした。

日本に於いては、家畜保健衛生所の立ち入り調査、指示書の提出が行われているが、農場での使用実態を示す情報は少ない。

今回、共通の指示書管理プログラムを使用する 4 診療所の動物用医薬品使用実態を報告するとともに、医薬品の適正使用に向けた取組みについて紹介する。